

佐藤（田村）俊子新論

渡邊澄子

A New View on Toshiko Satoh (Tamura)

Sumiko Watanabe

*はじめに

『今という時代の田村俊子——俊子新論』（『国文学解釈と鑑賞』別冊、渡邊澄子編、2005・7、至堂堂。以下『俊子新論』と略記）の拙文による巻頭論は次の一文を書き出しとする。

一九四五年四月一六日、左俊芝（佐藤俊子＝田村俊子）は上海で不帰の人となった。一三日、『女聲』刊行資金調達を目的の外出からの帰途、黄包車内で脳溢血に襲われて路上に投げ出され、群がり集まった人々に抱え込まれた病院で意識を回復することなく異国で露と消えた。虹口の東本願寺上海別院で一八日に行われた葬儀には、氷雨の降る寒い日だったが、俊子の死を悼み惜しんで嗚咽、号泣する中国女性たちが延々の列を作ったという。戦争末期、侵略者である日本帝国を祖国とする俊子が、なぜそれほど中国民衆に慕われ、その死を惜しまれたのだろうか。

従来男性中心に書かれてきた文学史が名を挙げていた文字通りほんの僅かな女性作家の一人として、明治末期から大正初期にかけて文学界に屹立した田村俊子は、時代の荒波に洗われながらも藻屑として消え去らず、読まれ論じ続けられている数少ない作家の一人である。一世を風靡した隆盛期、当時の二大文芸誌『新潮』（1913・3、17・5）および『中央公論』（1914・8）に三度まで（田村俊子論）特集の組まれていることが証明しているが、男性作家を視界に収めても一人の作家が相次いで三度まで特集に組まれるのは異例で（事件）ですらあった。この隆盛期が田村松魚との事実婚時だったことから田村姓を名のついで「田村俊子」が史上に刻印されてしまっているが、その生涯を視野におさめて俊子をトータルに検証するに際して、松魚を捨て、佐藤俊子に戻った俊子の意志を尊重して佐藤俊子として向き合うことにしたい。俊子もそれを望んでいるのだ

う。

ところで、一時期、盛名を誇った田村俊子文学は、改めて言わずもがなのことであるが、「赤裸々な性的関係や、身体をめぐる心理描写や官能的と言われる文体」で「女性の自己表現への苦悩」を「日本の家父長制家族の束縛」のなかで描いたと総括される「近代日本の女性文学の原点」と位置づけられる作家である。田村俊子の位置づけはその通りだが、生涯を視野に収めてその全体像に迫るならば、この位置づけは一面的に過ぎることが近年明らかになつた。その突破口となつたのは、冒頭の一節で触れた『女聲』を通して俊子の晩年を検証したことから遡行した読み直しによる。『女聲』については『文学』（岩波書店、1988・3）、『昭和文学研究』第一七・一八集（昭和文学会、1988・7、89・2）、『大東文化大文学紀要』二七号（1989・3）および『北京外国語学院・大東文化大学 交流協定十周年記念論文集』（1990・3）、『日本近代女性文学論』（世界思想社刊、1998・2）その他に発表した拙論が中国文学研究者の関心を呼び、俊子を援けて『女聲』編集に関与したために漢奸の汚名をきせられて凄絶な後半生を過ごさなければならなくなつた、中国人女性作家・閑露に焦点を当てた研究を招来させている。

ところで、俊子文学は使用名によって次の五期に分けられる。

第一期 佐藤露英時代（露英、露英女史）：一九〇三～〇九

（第一期に重なつて、佐藤露英・市川華紅・花房露子を名のつた女優時代があるが、本稿では省略）

第二期 田村俊子時代：一九一〇～一八

第三期 鳥の子時代：一九一八～三二、優香里時代：一九三三～三六

第四期 佐藤俊子時代：一九三六～三八

第五期 佐藤俊子・左俊芝時代：一九三九～四五

第三期の意味は大きい。しかし、従来俊子研究はほとんどが第二期中心である。終焉の第五期が瀬戸内晴美（後の寂聴）の『田村俊子』（文藝春秋新社、1961・4）によつて、老醜を驕慢で覆い寂寥を無惨な虚勢で隠し、周囲から「ヒステリ婆あ」と陰口をたたかれていたという晩年像に色染めされた姿を、いかにも実像かのように信じ込まされて重要視されていない。第二期の田村俊子文学を高く評価するその文脈にそぐわない以後はむしろ瑕瑾視すらされてきた感がある。

*第一期

作家を志し、創立された日本女子大学校第一回生として入学しながら退学し、幸田露伴門の新進「女流」作家は「露分衣」（『文芸倶楽部』1903・

2)を第一作として誕生した。以後、露英作は十数作に及ぶが、従来の俊子研究ではほとんど無視されてきている。終焉時から遡行して読み直しをはかろうとする本テーマ上、当然触れなければならないが、紙幅の都合上、いわば揺籃期といえるこの期については機会を改めたい。

*第二期

従来の田村俊子論はこの期に集中していて、研究は豊富なので、いわば対象とされた代表作には触れず問題点のみ述べるにとどめる。

瀬戸内の『田村俊子』が研究者による俊子論においても必ずと言っていいほど引用されて重要視されてきたことの事実上、この書について簡単に触れておきたい。瀬戸内が、一人娘を置き去りにして夫の教え子と駆け落ちし、ようやく作家登場を果たした直後の作品がポルノ小説とされて文壇から排斥され、再浮上するための必死の作がこの『田村俊子』だった。「私」が頻繁に顔を出す瀬戸内の、小説・田村俊子は、研究上有効資料とされてきたが、寂聴論には不可欠の書でも、俊子論において適切とは言いかねる。作品冒頭部で、生前の俊子には一度も会ったことがなく、多くも読んでいなかった上、文学的感銘をうけた作品も僅かだったが、瀬戸内が結婚生活をしていた中国在住時、俊子と懇意で、俊子に首つたけだった田村ふさにふきこまれて俊子に関心を深めたことが作品執筆の契機だったように語っている。小説なので責められないが誤りが多く、読みも恣意的に過ぎるが、そこを衝いたり批判したりするのは愚であろう。とは言え、カナダ時代、一時帰国時代、上海時代を第一次資料によって検証することなく、上海時代は草野心平からの聞き取りが主と推測されるが、その語りに依拠して書かれたように思われる。ところが、この晩年の上海時代を醜悪な姿に創り上げながら、俊子の葬式の情景を、「俊子の日華両国の友人たちは、雨の中を続々と集まってくる白い花輪の列のおびただしさにおどろかされた。文字通り華に埋もれた会場に、後から後から雨に濡れながらつめかけてくる参会者の数に目をみはらされた」とも書いていて撞着が見られる。戦争末期、侵略国である日本帝国の国民の俊子がなぜそれほど中国の人々に慕われていたかを瀬戸内は検証しようとしていない。それは第二期の代表的作品について瀬戸内流読みで採り上げながら、この時代の最も尖端的ジェンダー作「彼女の生活」(1915)を無視し、この年は「目ぼしい作品がなかった」と断定していることから、瀬戸内がフェミニズムやジェンダーとは無縁の人であったことをむしろ鮮明に浮上させてしまっている。男性絶対の制度下社会だったことでジェンダー意識に立つ上位者のもの言いによる〈新しい女〉論議に絡め取られているものの、前掲特集で、徳田秋声、相馬御風、岩野泡鳴らに、〈女流作家〉の冠称なしに作品について論じられる女性作家唯一の人として評価されていたことも、瀬戸内は十分に理解していなかったようだ。

「彼女の生活」が発表当時、特別の注目を得なかったのはその突出した新しさを評価できなかったからだろう。だが、「読み」にジェンダー論が導入されるようになって以後も、この時期は既に創作力の衰微期と見る論が多く、この作品を高く評価して論じられることは少なかった^⑧。衰微期

とされたこの年の五月に創刊された『女の世界』は雑誌の目玉企画とした時代を代表する女性へのインタビューの第一回に俊子を選んでゐる。家計の負担者は妻の立場にある私にあつてその点では私が家長で夫は私の被扶養者だが、そのことで夫を蔑視してはいない、むしろ、経済力で妻に圧迫される犠牲者で気の毒と語っている。妻が家計負担者となる夫婦の形態を肯つて夫が積極的に協力した例として高群逸枝、三浦綾子、大庭みな子などに見られるようになるのは後のことで、この時代の与謝野晶子や俊子の場合には、封建的家父長社会下だったために、経済問題を妻に負わせながら夫は夫権・男権を行使し続けて妻である女性を二重に抑圧するのが常態だった。晶子は最後までそれを引き受けたが、俊子は夫を認めながらも夫権・男権行使による自由抑圧には力づくで抗つていて、晶子をはるかに凌ぐ主体性を持った女性だった。それは、戦争前夜、早くも晶子が夫唱婦隨で真つ先に戦争謳歌を果たしたことに言えるだろう。自分を自分の人生の主人公として如何に生きるか、自己を生きる為には制度の壁をクリアしようとしたのが「彼女の生活」であり、それまでの〈男女の相剋〉文学から更に広い世界に飛翔しようとした必死の模索期の作だった。現状から脱出するためには松魚から身を引き剥がさなければ「ほんといゝ生活」は出来ないと本気に考えていた時、目の前に現れたのが「いゝ生き方」のできる相対者と信じ込んだ「理想主義者」の鈴木悦だった。俊子は松魚を芻狗とし、新生を目指して悦に走った。新たな文学を求めて七転八倒していたこの時の俊子は一葉の晩年に重なる。儒教的女徳にがんじがらめになりながら、制度の犠牲に供される女の哀苦を描くことで、女にとって制度の理不尽さを告発し続けた一葉が、消極的闘いから積極的闘いに進み出た女性像を「裏紫」や「われから」に描きながら、その文学を芸術的に高めきれぬうちに貧が病を急速悪化させて死による終焉をもたらしてしまつたが、この晩年二作は近年までほとんど無視に近い扱われ方をされてきたが、もしかしたら一葉文学の真価はこの後の作品に発揮されたかもしれないと思われるにつけて、「彼女の生活」も新しい俊子文学への飛躍作だが芸術的完成度は今ひとつであろう。それは、松魚との離別断行の機となつた悦への恋の燃焼だった。

*第三期

鈴木悦が朝日新聞社社会部に入社したのは一九一七年で、俊子はこの年の春、湯浅芳子と同居することで既に松魚を捨てていたが、松魚と知友関係にあつた悦との間に愛が成立して秋頃には隠れ住みする関係に発展している。といつても信頼関係にあつた人たち、高村光太郎や智恵子、上司小剣などは結構頻繁に交流し、相談などももっていて、法律婚でなかつたことで姦通罪には当たらないかもしれないが、俊子にとって悦との恋は〈炮烙の刑〉だろうと甘んじて受ける覚悟にたつ主体的行動だった。とはいへ、朝日新聞社社員で妻帯者の悦への世間の風は厳しいものがあつただろう。翌年五月、大陸日報社長山崎寧の招きで悦がカナダで発行の邦字新聞『大陸日報』の主筆に就くことになるが、それは厳しい風から身を避けるためだったのだろうか。悦のバンクーバー行きは彼が真に働きたいのある場であり、仕事であると考えて望んだことだったのか、そし

て、俊子もそれが最善の選択として賛成してのことだったのだろうか。悦がバンクーバーに発った後、俊子は丹念に日記をしたため、それを悦に送っているが、そこには、「恋しい」「愛している」が繰り返されていて、切ない情念の吐露となっている。好きとなったらまつしぐらの俊子である。悦を追って遠い北米に渡るか、いや、それは無謀に過ぎるか、俊子の心は千々に乱れながらも悦への恋情は止めがたく、「もうなんでもかでも、あなたの傍に行きます。あなたの傍へあなたの傍へ。」(悦に送った日記。1918・8・23、24)と渡航費稼ぎの原稿を書き、売るための千代紙の姉さま人形を作る。その程度では生活費に消えてしまい焦りが募る。高村光太郎が、万難を排しても行くべきだ、悦が彼女の来るのを熱心に待ち望んでいるならなおのことだが、外国体験はあなたにとって「よくなるとも、わるくなりやうがない。そうしてあなたはもつと変る、もつと根本的に変ってくる」、世間が何と言っても「どしくやるだけの事をやって見た方がい」と熱心に勧め、旅券取得の手助けもしてくれたことで、「ほんとに万難を排しても行く気になり、何でもいゝからやつて了はうと思ひ」、覚悟が固まると「大変いゝ気持」になつたと述べている。

バンクーバー滞在一六年、悦没後のロサンゼルス在留約二年、計一八年間を俊子は異文化圏で暮らすことになるが、光太郎がいみじくも先見したように、この期間をもつたことで俊子は確かに「根本的に変」つたが、それはよい方向だったと言える。この期間がなければ、この時代の誰もがなし得なかつたグローバルな視点に立ったスケール大な、あらゆる差別排除の闘いに全霊全身を投入した栄光の文学者として掉尾を飾ることはなかつたであろうから。

ところで、従来の俊子研究が一九一五年段階で創作力衰微と切り捨てていることは既に述べたが、この時期について必ずしもそうは言い切れない。「彼女の生活」を新しい世界への飛翔を期した作品と見る私の視点に立つならば、この期間は「いい生き方」イコール「いい文学」創出に必死になりながら、悦への恋情、世間の噂に苛まれながら、生活苦と渡航費用捻出に右往左往しなければならず、腰を落ち着けて創作に没頭できる状態ではなかつた。それは日記や悦宛て書簡などから推察できる。俊子は、なお、文壇で名のある作家(『新潮』1915・5、「俊子特集」)であり続けていたから執筆依頼はいくらでもあつた。だが、前述のような心の落ち着けぬ状態にあつていけばほまち稼ぎのエッセーや小品しか書けず、長篇を構想した作品はその前半作「破壊する前」のみで、旅券がおりたこともあつて後編を完成させずに終わってしまった。異文化体験を積極的に勧めた光太郎も、俊子自身も長期滞在は想像もしていなかつた。とにかく、会いたい悦に会いに行くことが当面の切実な思いだつたらう。府立第一高女から日本女子大以来の友人の小橋三四子がニューヨークに留学することになつてもいい(この段落での俊子の渡米に三四子は反対だったが)、それが力づけになっていたとしても、せいぜい一年か二年くらいのもりで各地を回つて見聞を広め、知見を深めて帰国するつもりだつたことが上司小剣宛て書簡から伺い知られる。自力での渡航費作りに懸命の努力をしていたが不安のない額を調達できていない段階で旅券がおり、一〇月始めの船に乗る決心をした段階で初めて、大丈夫だと思つたが万一のために百円だけ送つてもらえないか、でも、電替料が高ければ送つてく

れなくてもいいという手紙を悦にだしている。悦から百円は送られてきたのだろうか。受け取ったという記述はない。時代を考えると女の北米までの一人旅も勇気ある行為だが、激励の意味をこめた旅費の一部を阿部次郎などが出してくれたものの足りず、借金してもいるが、ともかく自力での調達は見事である。一〇月一日、メキシコ丸で俊子は横浜を発つが、日本を離れる直前と思われる悦宛の手紙は注目される。どこか山深いところに悦と茶屋でも出して、貧しくても清く美しい、愛に充ちた生活をしたい、あなたは「人生を清遊する」と言っただけで私は違う。「私は探求をつづけてく、人生の秘奥に達したい。そうして其れを表現した」「ほんとうの詩人的生活を送りたいの」、名声など欲しくない、「真の仕事」「真の生活」を遂げたい私は、世間など怖くない、どんな労働も厭わない、あなたとの愛によつて私は「偉大なもの」を「産出」できることを感じてゐる、とある。この手紙には、俊子と所帯をもつためのまとまった金を得ることをバンクーバー行きの目的としていたらしいが「其れは誤りだ」と書いてある。俊子の思念はより精神的である。精神的欲求が強ければ強い程物質的には貧しくなるのは当然で、それでよいので「お金を作る」ことを考えては「折角の私たちの覚醒の一步」が「悪い形で崩」されてしまふ、と俊子はいふ。「私ね」と俊子はそこを説明する。悦の許へ早く行きたくてその費用稼ぎのため、換言すると金目当ての仕事をしよつたら、「折角掴んだいゝものが失くなりかけたの。私はほんとに其れで吃驚したの。私はいま、其れは豊富よ。詩のお倉の中が——けれど、私は自分を完成させやうと云ふ望みが一杯で、其の欲求に夢中になつてゐるのね、菟でも其のお倉の中からだせないので。充滿はいつばいでも其れを好い加減につかみ出す事が出来ないの。」好い加減にしてしまわないためには、急がずに時間をかけてしなければならないともあつて、芸術度の高い文学作品創作を真剣に目指していたことがわかる。

半月後の一〇月二六日にヴィクトリアに到着した俊子は、家の用意が間に合わなかつたために大陸日報社の悦の部屋にひとまず荷をおろすと、間もなく、『大陸日報』を舞台にエッセー、評論、詩など表現活動を展開している。面白いのは、悦と共にあつたカナダ時代、俊子は筆名を「鳥の子」(時には、「とりのこ」としてゐることである。なぜ「鳥の子」なのか。その究明は岩見照代^⑥に譲り、結果的に一八年間も居続けてしまつた意味を探つてみたい。この国に来ての第一声、一月一四日の「土曜漫言」は「旅がらすの音信」である。日本にいた時には異国情調をエキゾティックと喜び憧憬していたが、いざ、自分がその憧れぬいていた地に立つてみると想像してゐたこととまるで違ふ。故国とは異なるこの地の自然の風物が私に親しんでくれない、この国の感情が私にはわからない、私の心臓の響きをこの国は取り入れようとしてくれない、だから淋しいという素直に感情を表出した文章である。それから八ヶ月後、俊子は「土曜漫言」欄を「土曜婦人論」欄に変えて論説を書き始めている。その第一回は「この町に住む婦人達に」(1919・8・3)である。要旨を紹介しておこう。この町に住む日本人女性の生活の侘びしさや寂寥は故国を遠く離れてゐることや両親や兄弟と別れてゐることの孤独感によるのは当然として、例えば演劇、音楽、美術など心を癒やせる慰安や娯楽などの皆無がそれを増幅させてゐる。それは自由に心情を吐露できる英語力を身につけていないからで、英語が話せるようになれば自分の望む事、思う事、言

いたい事などを言えて、日本人だけの閉塞社会の外に出て行くことができ、生活に楽しみも得られるだろう、「知識的の楽しみを求める事は、自分を非常に快活にさせる」のだからと。次週の「自から働ける婦人達に」(8・9)は、ひたすら「故郷に錦を飾る」ために孜々として働いているだけの毎日では充足を得られない、知識に対する渴望がなければほんとうの生き方はできない。豊富な知識と確かな思想をもつ世界の女性たちがどこまで進歩しているかを知ることによって自分が生まれ育った国の女性の遅れの程度も認識でき、現在の自己をどのように発展させたらよいか、そのためにどのような努力をしているか自己検証をする必要があるだろう。「陳腐な思想」に阻まれたまま家庭内に埋められていないで新知識を求めて覚醒しなければ人形になって働くだけになってしまう、という趣意のものだが、終わりを、新知識を得ることの重要性を抽象的に言ってしまったが、私がここに住む女性たちに「斯くあれ」と願う私の真情は理解してほしい、と結んでいる。

俊子は悦の仕事に寄り添い、この地の日本人の居住する狭い閉塞された領域を居場所としてひたすら働く女性たちの姿を観察して苛立たしさを覚え、居場所を抜けてもつと生き生きと意志的に生きて欲しいと思うにつけて、まず、何よりも知識を蓄え、会話を身につけて日本人町の外へ出て自由に行動するようにと訴え、その実現に向けての行動も起こしている。だが、この段階ではまた、この地に腰を据える覚悟はできていない。二二年三月にはニューヨークに出かけて小橋三四子と遊んでいるが、この時上司に送ったハガキには、「今年の冬か来年の春には日本に帰ります」とある。俊子は何時ごろ、この地に腰を据える覚悟が固まったのだろうか。このことに絡めていささか植民地問題に触れておきたい。

日本近代化推進方策として明治政府は富国強兵政策をとり、学問を立身出世の近道としたが、就学不可能の貧困層に立身出世の門戸は開かれず、彼らは甘い誘いに乗って幻想化された新天地を広大な米国に求めた。明治三〇年代のことである。日露戦争以後になると国富論や国土膨張論の「デオロギー」と相俟って、アメリカは「新日本建設」の地として「稼いで学べる」楽土とされた。いわば出稼ぎの意識で蓄財し、故郷に錦を飾るというイメージで喧伝され渡米熱を煽られた。藤村の『破戒』における瀬川丑松のテキサス行き背景である。だが、間もなく日本人の低賃金労働が熾烈な排日運動を引き起こし黄禍論を激化させ、出稼ぎの一次的渡航から定住する移民へと変化していった歴史を持つ。小学校を出た程度のとぼしい識見で貧困の喘ぎからの脱出をはかって甘言に乗せられてはるばるとやってきた移民たちの生活は、描かれた楽園とは裏腹なものだった。帰るに帰れず、日本人たちは小さく固まって忍従のなかでただ働くしかなかった。帰国の頃合いを漠然とはかりながら俊子の目と心は、とりわけ抑圧の重くかかっているこの地の女性たちから離れられなくなっていったのだろうか。

「自己の権利」(8・30)および「最近の日本婦人思想の道程 自己の権利(第二)」(9・13)は刮目される。自己の権利は人間として生まれた総てが同等に所有し同等に認めあわなければならない普遍的かつ正当な観念である。自己の権利に目覚めぬ弱者を虐げ搾取る強者に対して、自己の権利に目覚めて闘わなければならない。世界には自己の権利を主張して強者と同権的生存を享有するために奮闘している女性たちがいる。日本

在来の道徳的習慣性となつてゐる「女だから」を盲目的に甘受してはならない。階級差、性差による強者に打ち勝つには「人格的自己の権利」の主張が肝心である。「女に学問は不要」の目隠し時代はもはや過去で、三従の教えを自己の内心から驅逐して新しい道徳を作らなければならない、それには「人格の力」を磨くこと、と俊子は日本人女性に向けて熱っぽく奮起を促している。何とも長い表題を持つ「日会改造案通過に由つて全在留同胞婦人の覚醒をしなければならぬ事並びに諸婦人会の革新の必要に就いて」(1921・12・7)は、日会ごと日本人会の連絡協議会が早晩、結成されることになり、晩香披協議会バンクイに一名の女性代表を送り出せるに際して、移民社会における女性と母の役割の重大さを自覚、認識するようにと激励したものである。その自覚、認識を阻害するのはえてして男であり夫であることを繰り返して注意して、最盛期俊子文学に盛り込まれた問題意識が息づいてゐる。この地の移民、わけても女性の地位の低さの自覚を促し、差別への覚醒、闘いの必要を熱心に語つて、移民および女性問題にコミットしながら、私は「この後長く此の地に留まるものではない」ので日本人社会には「冷淡」だ、「健全な婦人会」の設立を「提唱」はしても「発起」はしないと書き込んでいる。すでに丸二年を経過しているがまだ旅人意識から抜け出ていない。だが、人種差別、低賃金に苦しむ日本人労働者の実態をつぶさに見てきて労働者自身の無知、無自覚が彼らを弱者の位置に固着させていることに恬淡としてはいられなくなつてゐる。悦が加奈陀日本人労働組合結成に顧問として参加し指導的役割を持ったのは二〇年七月で、二二年には日会議長になるに及んで俊子も移民問題に深く関わるようになってゐる。二四年始め、悦が大陸日報社を退社して民衆社を創設し、『日刊民衆』(創刊号は1924・3・21)の主筆を務めることになる。俊子もここに出社して翻訳部門中心に活躍し、悦が日本人労働組合の指導的立場に立つと俊子も本気になったのか、三〇年に発足した労働組合婦人部の部長となつてゐる。民衆社の一員として『日刊民衆』に筆をとりながら、『大陸日報』への寄稿も続けている。日本帰国後も佐藤俊子名で私の手元にあるものに限つても一九三八年一〇月七日号まで紙面を飾つてゐる。

俊子に覚悟の気合いのみられるのは二四年の「通俗講話会 設立に就いて」(2・9)である。カナダ市民として生活の安定と充実をはかるために、カナダの法律、日加条約の内実、移民地での諸問題を「根本」から学びカナダにおける社会的、政治的、経済的知識を身につけなければならぬとして、女性を責任者とした専門家を講師に招いた講話会を設立し、全一四回の日程、受講料その他について発表している。移民社会で生きる者たちが生活の充実をはかるために不可欠の知的向上と情操の豊穡をはかつた共進会や音楽会などを開催し、さらに、育児・子女教育の主たる担い手とされていた女性の責任の重さから「母の会」設立も提唱している。「国」や「人種」が例え異なるうとも人間として友愛関係をはぐくみ、みんなが住みよい世界を樹立する為には文化を「豊富」にすることが不可欠の信念から俳句の「あじろ会」、後に「木の芽会」で俳句(俊子は少女期、師について俳句を学んでいた)を、鳥の子(俊子)選者による「あかね会」で詩を募り、自らも発表して文芸活動を展開してゐて、カナダ移民社会で中心的、指導的立場に立つようになってゐる。ここには人種、階級、性差別に真向かつて闘う人の姿が見られる。この間に書いた小説

は、イスラエル建国神話を題材とした、バンクーバーに着いて間もない時期の「牧羊者」(1919・1・1)のみである。前半生を過ごした日本とは自然も文化も異なるだけでなく、未経験の低階層社会に身を置いて、悠然と小説を書いていられる心の状態ではなかったからだろう。だが、ここで得たものは大きく、光太郎の予測や期待を遥かに超えて俊子は変わった。資金調達が口実のほんの短期予定で悦が帰国したのは三二年二月のことだった。悦の留守を俊子は民衆社を守って待った。ところが翌年の九月、悦の急逝を知らされたのだ。俊子は動転したが、悦がカナダから女性を伴い日本で同棲していたことを知らない。「真の仕事」「真の生活」を享有できる人として恋に燃え、信じこんではいたのだが、芯には男性不信の細い流れが流れていて、ふとしたはずみに感じる相対者の言動や表情に、流れの水嵩が増すこともあったのだろう。バンクーバーで二人が暮らし始めて三年目に入った頃の湯浅芳子宛書簡(1922・10・31)には、悦との愛の生活の満足を語りながら、日本に帰ったらもう男との同棲生活は御免蒙るつもり、私は常に男性(「男権・夫権」と変換可能)と闘うような人間にできているらしい、「私一個の上に芽を出した問題は全婦人への参考として解決しなくつちやならない責任を感じてゐる、悦は一人の人間としては「善い人」だが、結局は女大学式女性を妻としなくては幸福ではない男だと書いている。鋭い。

悦没後、バンクーバーを引き払った俊子はロサンゼルスに移り、ペンネームを優香里に変えて『羅府新報』を表現活動の拠点にしている。その最初の仕事は「カリホルニアの一角から」とした恣意的に選んだ人物談「人に逢ふ」の連載である(1930・5・21〜10・4)。「今日から、この欄へ毎日何かしら書くことにする。いつまで続くか、私自身にも分からない。」で始まるが、悦の死のショックが大きかったためだろうが文章にパッションが感じられない。確たる居場所を見つけないことが出来なかったのだろう、ここでの滞在を二年ほどで切り上げて一八年ぶりに帰国したのは一九三六年の二、二六事件直後の三月三二日のことである。

* 第四期

そして、従来の「田村俊子論」ではほとんど価値を認められず、スキヤンダラスな時節とされてきた第四期となる。労働争議多発、関東大震災とこの大災害を利用した社会主義者(と疑われた者を含む)や差別視された朝鮮人の検挙・虐殺、治安維持法施行、発禁続出、円本時代の始まり、三・一五事件、プロレタリア文学隆盛、満州事変、上海事変、五・一五事件、日本国際連盟脱退、京大・滝川事件、佐野・鍋山の獄中転向声明、転向文学続出、小林多喜二虐殺、プロレタリア文学はじめ自由主義的著作物発禁続出等々、俊子不在時の日本はまさに激浪の時代だった。おおよその情報は得ていたものの、遠いカナダに身を置いていた俊子にとって、一八年ぶりの日本の空気は予想外のうそ寒さだっただろう。いわば今浦島の俊子だったが、文界における彼女のネームバリューは消滅していなかった。一息入れる間もなく、『改造』『婦人公論』『中央公論』その他を舞

台に表現活動を始めている。富本（旧姓・尾竹）一枝、岡田八千代、湯浅芳子など旧交を温めた友人のほか、北米生活で差別のない人権平等を求める社会主義的思想を内面化していたことから窪川（佐多）稲子や宮本百合子と親しく交流するようになったのは自然だった。結局は短期間となった日本滞在中、互いによく影響し合つて篤い友情を交わすようになった新しい友人の丸岡秀子との出会いは、帰国後二ヶ月、富本憲吉の窺開けに一枝に招かれた祖師谷の家で紹介されたのが始まりだった。一枝は青鞥時代からの友人俊子を秀子に逢わせたくて必ずくるようにと連絡してあつたのだ。俊子の不在中に創刊され廃刊された長谷川時雨の『女人芸術』には岡田八千代を介して仲間となり、海を隔てて交流を持ち、寄稿もしていたが、『女人芸術』は戦時体制に寄り添つた雑誌『輝ク』に変身していた。「輝ク会例会」での俊子歓迎会や、旧友と俊子にとつて馴染みの深い著名雑誌の編集者たちによる帰朝歓迎の食事は俊子を悦ばせはしたが、以後、「輝ク」会には慎重に距離を取り始めている。この雑誌の銃後運動への積極加担に組することは出来ないと思つたからだろう。長谷川時雨および『女人芸術』に対しての共鳴、期待、応援はカナダ在任時にこの雑誌に送つた手紙から容易に推測される。『女人芸術』廃刊を知つた時の、「女人芸術が育つて行くのと一緒にあゝした若い人達の思想も熟して行く事が出来たでせうのに、それを考へると、唯一の新しい婦人たちの気焔の吐き場所であつた女人芸術が消えてしまつたことは惜しいことでした」に見られる「思想」の重視に着目したい。その後の手紙には、桜を思うと日本に帰りたい気もするが「今のあの極端な日本のミリタリズムは考へてもいや」、「私が日本にゐたら多分×××のファンにでもなつてゐたらうと思」うと「思想」を問題視している。さらに移民社会について、「とうてい想像もつかないと思ふんですがそれこそ日本人は人間並みに扱はれてゐない」（以上は1933）のです、それで「私達は、日本人の労働組合を作つて加奈陀の労働団体と提携し政治的には、ソシアリスト、パアティと連絡を取つて階級的な運動によつてそこから人間並みに扱はせやうとしてゐる」（1934）のですと言ひ、婦人部の運動についてもかなり詳しく説明している。カナダ時代が俊子を人間主義に根ざしたソーシャリストとして思想に忠実な人間に創り上げていたことが分かる。ミリタリズムべつたりの『輝ク』や「輝ク会」に同調、協力することは彼女の思想が赦さなかつただろう。

戦時色加速の時勢下で居場所を求められず不安と焦燥に苦しむ俊子が、転向者として矜持を失い妻の経済力に縋る自虐に苛まれていた、俊子から愛していた窪川稲子の夫鶴次郎と男女関係という陥穽に陥つてしまつたのは何と云うことだろうか。尊敬する先輩作家に夫をとられた稲子の激怒、報復は凄い。この問題を俊子没後に佐多稲子は『灰色の午後』（1960）に描いたが、この作品は俊子を一方的に敗北者に仕立てて断罪することでも自らを救済した作と水田は見抜いている。俊子は鶴次郎との関わりを素材とした好編「山道」（『中央公論』1938・11）を残して中国に去ることになる。この期の俊子の表現活動の収穫はこの「山道」だけかのようにされてきたが決してそうではない。時代の趨勢の目潰しにあつて真価を讀みとれぬままに埋められてしまつてきたが、『俊子新論』ではそこを詳細に検証して光りを当てている。紙幅の都合上、寸言で触れるにとどめ

るが、評論やエッセー類に、昭和初期に秀囲気が似ていることが危惧されている現在だからこそ看過してはならない貴重な発言が多々あることを明記した上で小説に限って見ると、「小さき歩み」三部作、「昔がたり」、「残されたもの」「馬が居ない」「カリホルニア物語」「侮蔑」など、ファシズム跳梁の時勢下だったことを思うとよくぞここまで書けたものだと思えるような作品を発表している。俊子は貧困からの脱出を図った移民でもなければ当然無産者でもない。むしろその逆で賛沢を享受し、例えその日の米嚙に窮することがあっても昂然と胸を張った生き方を貫いた人だった。だが、カナダ生活は俊子を意識的思想的に移民、無産者にしたことは確かである。これらの作品には封建的かつ閉鎖的でありながら己高しとする傲慢でしかも矛盾に充ちた日本社会を相対化した視点があり、「国」を超えたグローバルな視座に立った人と人を優しく結びつける地球人社会構想が伏在している。それを達成するには民族、階級、性などあらゆる差別の垣を取り払った人権平等の確立であることを示唆しているのだ。移民の一世と二世が抱え持つ異なった苦悩にも寄り添った作品は、俊子の思想を雄弁に照らし出している。

エッセーの部類に入れることも可能な「馬が居ない」はよくぞ発禁の餌食にされなかつたものと鳥肌のたつ作品である。最盛期の俊子の位置づけが「愛欲と我執に満ちた闘争を描いた」作家だったことで、当局の監視が跨いでしまったのかも知れない。丸岡秀子生涯の名著とされる『日本農村婦人問題』はこのテーマに向かわせたのは富本一枝だが、一本にまとめられたのは俊子の背押しだった。「馬が居ない」は多分秀子の故郷信州に同行した時、二人が見た車窓風景と推測される。農家にとって欠かせぬ労働力である馬や牛が田にも畠にも見られぬ悲惨だった。野間宏の「顔の中の赤い月」には次のような場面がある。

(略) 既に彼等には馬と共に歩いて行く力がなくなっていた。彼等の脚は十日間程取はずさずつけていた巻脚絆の中で感覚を失っていた。

そして坂道を一步ふみ出すためには多大の血液を失わなければならないように思われた。

「何をしゃがる。」と分隊長代理の兵長が、後尾にさがってきて、馬の手綱を握っている彼等の手に鞭を放った。

「馬にぶらさがりやがって、馬のくたばってるのが解らんのか、おめえらの代りはあつても、馬の代りはねえんだぞ。(略)」

食糧増産を至上命令としながら、農業に不可欠の馬は戦地へと徴発されていたのだ。「馬の代りはない」ほどに徴発され尽くしていた戦時下の実態を、馬を奪われ、夫や息子も戦争にとられて、老人と女と子どもの手作業で農業に立ち向かう苦難をも合わせて描いたこの作品は反戦小説として感動的である。この作品を書いた頃と思われる『大陸日報』掲載の「総ては変つた 帰去来の身に映るもの」(38・3・24)に俊子は、「日本に帰ってから二年の間に、日本の文学界の動きは政治の動きとの微妙な関係の上で実にさまざまな変化を私に示した」の書き出しで、文学界を分析し、現在の状況に至った流れの帰趨、また、かつての新しい文学がある方向に転移して質的に力を弱められている現状を「はつきり」私自身の眼でみており、「この重々しい波間を潜つて」どの方向に行くのか、「私自身は再び築き直さうとする自己の文学の上に、かつて自ら行つた

自己の芸術への変革と、その後の思想と長い生活経験とを何う統一すべきか」まだ定まらず「プーアな自由意識の中に閉じ籠」もるばかりだが、自分の目標を定めるためには「この混乱の中で」「深く周囲を探索しなければならぬ」という意味のことを書いている。「かつての新しい文学がある方向に転移」はプロレタリア文学の転向文学への移行を意味するだろう。また「学生の問題 文化随想」(38・7・16)には、日本は「国民の精神総動員を行ひつゝある傍、未来の日本国家を守る唯一の若い魂に無理由な不良の烙印と鞭打を与へて其の精神を虚勢させつゝあると云ふことは不思議な政治的矛盾である」とあり、「婦人の能力 貧弱な廢物利用の智慧」(38・10・7)も、国民精神総動員のかげ声をかけながら政治的行動に未経験な頭でつかちな女性が政府委員では実の上がるわけがないと、国内では言えない心情をカナダで漏らしている。本心だろう。男女問題は女性が悪者視される場合が多い。居心地のいい日本ではますますなくなっていたこともあつて、非難の矢から身をそらす意味もあつてのことだろうが、中央公論社特派員として福岡から空路中国に向かったのは三八年一月九日のことだった。故国滞在二年半で、待ち受けてくれる人っていない未知のしかも戦争の相手国へと旅だった、その心中は必ずしも深刻だったとは思えない。湯浅芳子宛の書簡からひと月くらいで帰る予定だったからだ、それだけではなく、外国生活も貧も孤独も慣れていて打開路に成算はなくても俊子は恐れることのない人だったから。

*第五期

俊子の中国時代は未解明部分を残しているが、中国各地を経巡りながら『婦人公論』『改造』その他に送られたエッセーなどでおおよそは掴めるが詳細はまだ検証されていない。南京陥落直後に南京に入っているはずなので、戦いの跡や、もしかしたら虐殺事件について見聞していたかも知れない。カナダに渡って三年目の一九二二年一〇月段階で、湯浅芳子に、「私は大分、社会主義者の傾向を持ち初めてゐます。然し、アナーキズムでもなしコミュニズムでもなし、何ズムかまだ分からない」(10・31)と書き送っている。俊子が女性解放運動につながる組合活動に本腰をいれるようになるのはこの後なので、思想が本物になるのもこれからだろう。そのような思想を持つ俊子が戦争の現場をどのように見たのか関心せずにはいられない。深読みすれば、日本帝国主義の実態をまざまざと見たことで、帰れなくなったのかもしれない。

渡中三年目の四二年以後はかなり詳細に解明されてきている。その端緒は前述の、『女聲』紹介による。俊子の晩年像は繰り返しになるが、瀬戸内によって、孤飄を往年の盛時を誇る驕慢で塗り込めた老醜をさらしていたかのように色染めされてそれが固定化されてきたが、それがいかに歪められたものであつたかは、俊子が上海で中国女性解放を目指して発行し続けた中国語雑誌『女聲』を虚心に読めば容易に解ることである。この雑誌は幻の雑誌視されていて、現物を手にして検証した人はいなかったのだ。汪兆銘政府の文化顧問として敗戦時まで任務を遂行していた草野心平の多分自己弁護が内在されていたと推測される、一方的言説(俊子は既に死去)を鵜呑みにして作られたと思われる物語りに不信感を抱いた

私は、そこを糺せはしないだろうかとの思いから、『女聲』を求めて上海に赴いたのは一九八七年のことだった。全三八巻をつぶさに読み込んだ私の感動はむしろ衝撃というものだった。俊子が「左俊芝」の中国名で発刊した『女聲』創刊の経過、この雑誌の目的、内容、歴史的（女性史から）意味、俊子の思想および人間像等については既に前掲拙論によって何度か発表しているので、紙幅の都合から本稿では省筆し、近年、中国文学研究者によつて研究の進んでいる、『女聲』および、この雑誌発行に俊子を援け、俊子とは人間的信頼関係にあつた関露についていささか触れておきたい。

『女聲』の主宰者俊子を、一九二〇年生まれ中国女性作家梅娘は、中国女性の心に永遠に刻み込まれている人と述べているが、『女聲』の原物をただの一冊にも目を通すことのないままに日本帝国主義のプロパガンダ誌と、近年の学会で発表されてもいるのだ。日本軍の占領下にあつた上海で、「女性の声、女性のための声、女性による声」を基本編集姿勢とした女性向けの中国語雑誌『女聲』を俊子が創刊したのは一九四二年五月一日のことである。この時期は日本軍の厳しい思想統制の下で多くの出版物は停刊、廃刊に追い込まれ、上海在住の作家をはじめ知識人たちは弾圧によつて言葉を封じられていた。日本帝国主義のプロパガンダを鮮明に標榜した日本語雑誌の刊行は歓迎されたが、中国語雑誌の刊行は至難の時節だったという。その網の目を欺く高等戦略は疑念を持たれぬように装うことだっただろう。日本大使館とコネをつけて軍部から用紙調達の便宜を可能とし、表層的には汪兆銘政権の宣伝誌の形をとることになる。内容は終始、あくまでも遅れた中国女性の解放を意図して企画、編集されている事実を見れば、日本帝国主義に加担した雑誌などと位置づけることの愚かさは誰の目にも明らかであろう。雑誌『女聲』とこれを創刊、編集した晩年の俊子像（よき協力・理解者の関露にも触れて）のおおまかな紹介は、時、あたかも中国における戦後の政治的混乱、続いた文化大革命の暴風が治まってようやく安定期に入り、その間の、理不尽にも凄絶な被害を受け犠牲となった多くの人々の名誉回復や救済が果たされた後で、検証や研究も勢いづいていた好期だった。中国文学者による『女聲』研究はようやく盛んになったが、立脚点が中国文学研究であることから、当然と言えば当然だが、俊子を援けて俊子と共に『女聲』編集に献身した中国人女性作家関露が中心とされている。中国文学研究者は俊子について深く知らない。往年の著名作家としてその名は知っていても、北米時代に遂げた思想的变化を知らない。とは言つても、一九三三年に魯迅と周作人によつて商務印書館から翻訳出版された『現代日本小説集』の魯迅による序文で、入収予定だった俊子の作品が翻訳が間に合わず入れられなかつた残念さ、俊子文学の新しさが述べられていて、俊子は進歩派作家として認識されていた。そのために日本の進歩派、さらには共産党員の訪れの可能性を期待して、関露は中国共産党から情報収集のためのスパイとして女聲社に送り込まれたのだった。関露は忠実な共産党員として日本人俊子と二人三脚で仕事をする中で、内実を知らぬ同志たちから漢奸と蔑まれることを覚悟して任務に精励したのだった。そのような深謀が謀られていたことなど俊子は知るよしもなかつた。後には薄々感づいたらしいが俊子は意に介さなかつた。関露も俊子の中国民

衆、わけても旧弊に呪縛されて身動きならず苦しんでいる女性たちへの真実の愛を知るに及んで党から与えられた任務を越えて、人間的な堅い絆で結ばれていたのだった。

ほとんど一日毎に急騰する物価に翻弄されながら発行を続ける俊子の奮闘は涙ぐましいものがあつたらしい。侵略国・日本帝国の一員である俊子の死に際して、戦争下であつたにも拘わらず、氷雨の降る寒い日に号泣しながら白い花を持つ女性たちの長蛇の列が続いたというのも、俊子の真の愛が受け容れられていたからだろう。ところが戦後、関露は『女聲』に関わつたことで漢奸の罪に問われ、指令者の死で、党の指令に従つた事実の証明者を失い、冤罪によつて拷問や自白強要その他、苛酷な受難の長年月を閲せざるを得なくなる。何という残酷さだろうか。この残酷を俊子は知らない。関露の名誉回復は実に戦後三六年半後の一九八二年三月二三日だった。身の潔白が証明された嬉しさは心の張りを失わせ、病の床でその年の一月五日、大量の睡眠剤を飲んで関露は自裁した。戦争は幾多の理不尽な悲劇を生む。国に忠誠を誓い、懸命に生きながら非業の死を遂げた関露の生涯を検証し顕彰しようとする中国文学研究者に、彼女の受難の原因である『女聲』、その主宰者である日本人俊子に恨みの感情が萌したとしても無理はない。だが、にもかかわらず、揃つて『女聲』の果たした役割を高く評価し、僅かな日本軍関連記事がほんのおさなりの装いだつたこと、女性名を使つた男性党員投稿者の原稿も多く載つて賞金が運動資金になり、ひそかな抗日運動の連絡網にも機能していたことが明らかにされている。その役割を果たした功績はすべて関露にあつたように論じているものもあるが、例えば、関露の配慮があつたとしても、社長で編集責任者の俊子が容認、決定しなければ不可能だつたことも事実で、命を賭して中国民衆の為に闘うこと、そこにはそのような原稿を掲載する編集を俊子が賛成、容認したことも含めて、誌面構成は、俊子が自己の信念に基づいた「真の生き方」の表徴だつたことは疑えない。

*まとめ

紙幅を失つたので、一言でまとめたい。女性の人権を認めない家父長制社会制度に真っ向から対決して、フェミニズム文学で注目を浴びた日本最初の職業作家が田村俊子だが、その文学は、官能の香り高さや濃艶かつ甘美な情緒で妖しい魅力をたたえた文体による男女の相剋においてのみ長く評価されてきて、活躍の絢爛期以後はあまり注目されず、むしろスキャンダラスな話題提供者とされてきた感が強い。だが、論の対象とされた文壇の中心的存在だつた時期の作品を俊子は、自ら批判し、これを超えようと苦しみ続けたのだつた。内包されていた俊子が求め続けていたものを北米時代が思想化した。帰国したファシズム跳梁さなかつた日本滞在二年半の仕事は無視はもろろん批判や過小評価を覆すものであり、上海での『女聲』刊行は、グローバルな視点で、あらゆる差別と闘い抜いた人権平等主義者として掉尾を飾るにふさわしい仕事を文字通り命をかけて成し遂げている。俊子は日本近代の他に例を見ぬ天賦人権、独立不羈の自由な個人として生き抜いた傑出した文学者であり、人権確立運動家で

あり、女性であった。到達点から出発時の露英時代を検証してみると、俊子には初発から人権思想に繋がる生きたい生き方を生きようとする〈主体〉を持つ、この時代、稀なる人であったことを知ることが出来る。俊子研究の課題は尽きない。

- ①「田村俊子論〈特集〉について」(西田りか『俊子新論』所収)
- ②「ジェンダー構造の外部へ」(水田宗子『俊子新論』所収)
- ③拙稿「田村俊子の『彼女の生活』の位相」(大東文化大学『人文科学』第五号、2000・3)
- ④近刊『文学者の手紙』第八巻所収書簡参照。(博文館新社)
- ⑤「鳥の子」の飛翔——『大陸日報』を中心に」(『俊子新論』所収)
- ⑥拙稿「田村俊子」(『日本女子大学に学んだ文学者たち』所収、翰林書房、2004・11)
- ⑦参照。ついでに言えば、鶴次郎は俊子以外の女性とも何度か関わりをもっている。
- ⑧『俊子新論』所収の、鈴木正和、羽矢みずき、王紅、高良留美子による論参照。
- ⑨「俊子さんを語る(『俊子新論』所収)」(※梅娘は私にとつて「忘年交」(年を忘れて親しむ)の作家。)
- ⑩岸陽子、関露、丁景唐、与小田隆一、前山加奈子各氏の論(『俊子新論』所収)、(*丁氏は『女聲』に女性名で投稿し、やがて寄稿者になり、戦後、編集者となった人で現在も健在。)
- ⑪家計維持に直結する執筆営為であった樋口一葉がいるが、一葉の時代は出版事業が近代化されていなかったため、仕事量・価値に見合う収入は得られず、従って職業作家とは必ずしもいえない。
- ⑫「佐藤露英の小説」(中島佐和子『俊子新論』所収)